

---

# **流転恐怖傑作選 『てけてけ』**

資源?世

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

流転恐怖傑作選『てけてけ』

### 【著者名】

資源?世

N9832Y

### 【あらすじ】

作者HPより転載。

とある夕暮れの帰り道。街中で見知らぬ制服を着た少女に声をかけられる。彼女は電柱の影に体の半分ほどを隠しながら尋ねてきた。  
「足、ありますか……？」と。

メリー「えーと…… 今日は、キャベツとソーセージン、葱、あと……  
ピ…… ピーマンください……」

八百屋「へいー。」

買い物用のメモを読み上げると、八百屋は言われたものを次々と買い物袋へと詰めていく。

八百屋「いつもいつも、おつかい偉いねえ」

おばあちゃん「ホームステイってだつけ？ 本当、慣れない土地だっていうのに凄いじゃないの？」

メリー「え？ そ、そろかな？ あはは

街の人たちには、メリーサン、ソアラ、メルの3人は外国からホームステイをしているところ扱いになっていた。一般の人たちに都市伝説なんていっても信じてもらえるようなものではないし、受け入れてくれる器があるとも思えないための方便だ。

100%嘘をついているわけではないが、やはり、心苦しいものがあるのも事実ではあった。

八百屋「今日は特別サービスで少し多くしてあげよつね

メリー「あ、ありがとうございます！ あ…… で、でも…… ピーマンはむしろ少なくてもらえたと…… 嬉しいかな？ なんち

やつて……」

八百屋「はつはつはー。 わすがに代金分より少なくしたら、おじさん怒りれちゃうから。 じゃあ、ピーマンだけはおまけなしにしてこうか」

メル「……色々なものを食べないと…… 大きくなれないって、姉様が言つてた……」

メリー「あつ……。 もうせ、私は身長も胸もちつたりこむ……」

八百屋「なに、 まだまだ大きくなるわ。 中学生だもんなん?」

おばけちゃん「まだまだ育ち盛りじゃない。 一番伸びる時期よ」

メリー「……えーと…… 私、一応、17歳です……」

申し訳なさそうにぽつりと呟くメリーさんの一言に、八百屋のおじちゃんとおばけちゃんの動きが止まった。

八百屋「……あ…… はつはつはー。 な、なにー。 まだ成長期は18歳くらいまであるってこづからなー。」

おばけちゃん「そ、そつよー。 成長期なら一年で10cmや20cmくらい伸びるわよ、ねえ?」「…

メリー「うう…… 人の優しさって…… 痛いよ……」

メル「?」

これから始まるのは、そんな切ない秋の日の出来事であった……

メリー「毎日、牛乳飲んでるのに、なんで、ビートも成長しないかな……」

メリー「……メリーサンは、大きくなりたい?」

メリー「そりゃあ、私も女の子ですから……。もうちょっと身長も伸びて欲しいし……む、胸も……もうちょっとは……」

メル「ちょっと?」

メリー「うう……ちょっとととこうか……もととこうか……。  
せめて、人並みには!」

メル「……希望を捨てれば、見える明日もある……つて、本に書いてあった……」

メリー「あうう……! も、そこはかとなく傷ついて言わないでよー!」

真っ白な服に真っ白い帽子のメリーサンと、それと対照的な黒ずくめの服装のメル。身長他、ある意味、対極的な二人で夕焼けの家路を歩く。一見するとかなり目立つ二人だが、街の人々はといえば、もう見慣れているためか、特に気にした様子もない。

メリー「つて、あー！ いけない、鳥の手羽先買つてなかつた！  
早く買いに戻らないと……」

メル「手羽先……？」

メリー「鶏さんの……羽の付け根あたりかな？ そののお肉だよ。  
それで足はモモ肉。胸の近くがササミ」

メル「羽のあたり……」

メリー「うん。多分、そうだよ」

話しながら、肉屋へ行こうと振り返つたとき……

女学生「あ…… あの…… すみません……」

電柱に隠れるようにして、一人の少女が、道行く一人を呼び止めた。  
このあたりでは見ないセーラー服を着た女の子だ。

メリー「え？ どうかしましたか？」

女学生「あの…… えーと…… その……」

その子は、「」と口元を押しながら、ぱつが悪そうな表情で  
こつたずねてきた。

女学生「あ、あのー、あ、足、いりますか？」

メリー「え？ 足？」

その質問には聞き覚えがあった。メリーたん達と同じく都市伝説に名を連ねる者がする質問である。そして、その回答を間違えれば、足を持つていかれる。

メル「……覗うのは手羽先、…… 手のお肉。足じゃない……」

メリー「あつー、メルちゃん、那人、お肉屋さんじゃない……」

メル「……じゃあ、お魚屋さん?」

メリー「やつこいつ意味じやなくて……」

女学生「足…… いらないんですか……? あ、ありがとうございます!」

そう言って、彼女の表情がぱっと明るくなることに変わる。そして、彼女は人間の胴体すらも切断してしまった大なハサミを取り出す。

女学生「では…… 覗こますね?」

メリー「え?! そ、そんな…… やだ…… な、なんで……? カシマさんの話読んでないのにカシマさんが来るの?」

女学生「え! あ、あの…… ハ、ハめんなさい……。わたし、てけてけです……」

せつこうで、彼女は電柱から姿を現す。その体には下半身がなく……。

「……あれ、ソーセージの原料…… やっぱりお肉屋さん?」

そう言つて、てけてけの体から「ほれる腸を指差す。一度、全員の視線がそこに集中し、すぐにその生々しい光景から目をそらす。

てけてけ「ち、違います!」

メリーハー「うう…… 私、しばらくソーセージ食べられないかも……」  
てけてけ「ソーセージ、ソーセージ言わないでくださいよー。私、いつも、これ見てるんですよ?ー。…………もうソーセージ食べられなくなるじゃないですかー。と、とにかくーーー! あ、足を貰いますよー。」

せつこいと、電柱を滑り降り、肘をつかつて匍匐前進でじわじわと近づいてくる。

メリーハー「逃げ…… 逃げなきやー!」

メル「……家に帰る?」

メリーハー「急いでー!」

メルの手を引いて、メリーハンは走り出す。だが、てけてけの最高時速は100~150kmと言われている。走ったところで逃げ切れるものじゃないのは分かっていた。

メリーハー「でも、逃げないと怖いもん!ー!」

メル「?」

てけてけ「え？ そんな、逃げないでくださいよ！ あー……ち  
よっ、ま、待つてーー！」

メリーハー「え？」

どんどんと小さくなる声に感る感る振り返れば、既に100m近い差がついていた。

噂とはかけ離れて、そのてけてけのスピードはやたらと遅いものだつた。せいぜいが早足で逃げたら、追いつかれるかどうかといったところだろうか。

てけてけ「あー、もう！ 胸がするし、引っかかるし、重いし……いい加減、匍匐前進やめたい……」

メリーハート

さつきは電柱に隠れていたため、はつきりとは分からなかつたが、今この状況なら良く分かる。あのてけてけは胸が大きい、つまりは巨乳だ。だが、匍匐前進で進もうとした場合、胸が引っかかつて上手く進めないようなのだ。

メリーハウス「……何食べたら、あんな風になれるのかな……？」

「……ピーマン？」

自分の胸に手を当てて考え込むメリーサンであった……

てけてけ「はあつ…………はあつ…………つ、疲れたあ…………」

半分ほど距離を縮めたところで、てけてけは道端へ寄りかかって小休止始めた。たぶん、この分なら、歩いて帰つても問題ないかもしない。

メリー「あの…………私達、帰るから。追いつこないでね？」

てけてけ「いめんなせー、もうちよつと待つて……くださこ…………。  
はあつ…………はあつ…………」

しかし、追いかけてくる相手に待てと言われて待つ人はいない。

メリー「…………あの…………ペーマン一いつ置いておくので、よかつたら  
どうぞ」

てけてけ「え？ なんでペーマン？！ しかも、なんか凄く憐れみ  
を感じるんですけど？」

・ · ·

メリー「あ…………手羽先買い忘れた…………」

メル「…………買つてくるわ。」

メリー「う…………でも、また、てけてけさんと会つたら怖いし…………。」

もつ、家は田の前だし、ママさんにまづから謝りておへむ

ふつと、ため息を一ついてから、家路を歩く。その向かいから見慣れた姿が見える。

ソアラ「あれ？　あなた達、今帰り？」

メリー「うそ。ソアラちゃんは、やつしたの？」

ソアラ「ちよつと友達が遊びにくるついでに全然来ないから探しにね。まったく、あの子つて、いつも世話をせんだからすぐわかる。素直じゃないだけなのは、よく知っているから」

メリー「ソアラ……　怒つてる？」

ソアラ「な、なによ？」  
メリー「あはは、ちよつと違うかな？」

メリー「なんでもないよ。それより、友達待たせちゃダメだよ？  
こつてらつしゃーこ、気をつけたね」

メル「らつしゃー……」

ソアラ「『らつしゃー』じゃないでしょー。『こつてらつしゃー』だからねー もー……。それじゃ、こつてらつしゃーかー。」

夕暮れの町をソアラは駆けていった。その後姿をみながら、ふと思

うのだった……

メリー「……ソアラちゃんも、私とあんまり身長変わらないんだよね……」

メル「?」

メリー「やつぱり、食生活なのかな……?」

メル「……でも……ソアラは成長期だから……伸びる?」

メリー「あ、あひ……！　い、痛いよ、メルちゃん。その一皿は……」

…

メル「?」

メリー「それじゃあ、ママさんが帰つて来るまで、お勉強の時間だね?」

メル「……都市伝説の?」

メリー「うん！　私は都市伝説上級認定試験でキャリア組になつて、1ランク上の人が持つたメリーさんになりたいから。メルちゃんは、都市伝説としての生き方と日常生活の基本知識とか、しっかりと身につけて……お姉さんに心配かけないようこしないとね?」

「メリー、うん、姉様には、笑っていて欲しい……」

二人はそうして、数々のテキストを広げる。そこには様々な都市伝説の問題が書かれていた。

メリー、「えーと……カシマさんの種類を10種類答えよ……んー……、まずは分かるのから進めようかな?」

あつむりと最初の問題を諦めて、次の問題へと進む。

メリー、「首都高最速都市伝説決定戦において、史上最速といわれた、今は成仏した首なしライダーの本名と通り名を答えよ……。つ、次……」「……」

問題を読んだだけで、次から次へとページをめくつしていくメリーさん。だが、どれもレベルが高すぎて、まともに答えられるものではなかった。さすがに難関と言われる上級認定試験だけのことはある。

メリー、「……やっぱり、先輩のいうとおり、初級試験から始めたほうがいいかも……」

あまりのレベルの差を知つて、メリーさんは思わず、机に突つ伏してしまつ。

「? ? ? 「はあ……はあ……や、やつこつこた……」

メリー、「ん?」

不意に聞こえてきた、その声に後ろを振り向くと……

てけてけ「あ…… ピーマンの人……」

そこには、いつの間に家に上がり込んでいたのか、てけてけの姿があつた。

メリー「え？ あ、あ…… て、てけてけさん！？」

メル「…… てつてけヒーさん？」

てけてけ「てつてけてーじゃないですよ！… てけてけです！…」

メル「…… ソーセージの…… 人？」

てけてけ「う……。」めんなさい、その呼び方やめてください……

メリー「な、なんで……？ ま、まさか、ピーマンを返しにきたの？ あれはあげたものだから、気にしなくていいですから！…」

てけてけ「え？ ち、違いますよ！…」

メル「…… 手羽先買つてきた？」

てけてけ「なんで、私が手羽先買つてくるんですか？！」

メル「じゃあ…… モモ肉？」

てけてけ「いい加減、肉屋の発想から離れてください！…」

メリー「えと、えと…… カシマのカはカッヅゼリーのカー、カシマのシはシュークリームのシ！ カシマのマはマンゴープリンのマ

「……」

てけてけ「だから、私、カシマさんじゃなくて、てけてけです……！あと、全部、間違つてますから……。その呪文じゃ、おこしそうじゃないですか……！」

メリー「あつ…… ちよつと待つて…… 今、先輩にてけてけさんを追い返す呪文を教わるから……」

てけてけ「え、えーと…… 追い返されると困ります」

メリー「えーと…… 先輩の電話番号は…… エーとー。」

メル「1、1、0？」

メリー「1、1、1……」

てけてけ「あ、あの、それ違います……！違つ人きますよーーー！」

メリー「つう…… ひつく…… い、怖くないもん…… 私だつて都市伝説のメリーサンだもん！ 警察に頼らないで、てけてけさんを撃退できるもんーーー！」

てけてけ「つて、先輩に電話かけるんじゃなかつたんですか！？ 本氣で警察に電話するつもりだったんですけどーーー？」

メル「メリーさん…… 落ち着いて……」

そう言つて、パニックにおちいるメリーさんを抱きしめるメル。そのやせしい抱擁に安堵したのか、メリーさんは落ち着きを取り戻す。

メリー「メルちゃん……んつ……あ、ありがと……」

メル「……大丈夫だから……」

てけてけ「えと……いいですか?」

メリー「あつ……まだ、いた……」

てけてけ「あの……『めんなさい』、まだいました……。あ、でも……私は別にお一人の足をとりにきたわけじゃなくて……」

と、てけてけの話を遮るように、ピーポー！　ピーポー！　近くに救急車のサイレンが鳴り響いた。

メル「も、呼んだから……」

メリー「え？」

救急隊員A「重態の人人がいるといつのは、ここですか！？」

てけてけ「え？」

わけのわからないといったメリーさんとてけてけを差し置いて、やつてきたのは、救急隊員であつた。彼らは、すぐにてけてけに目をやると、驚きの声を漏らしながらも、すぐにてけてけを担架に乗せる。

てけてけ「え？　あ、あの……？」

救急隊員A「なんて、むごいんだ……。体の半分を失うなんて……。  
でも、大丈夫！ 君は必ず助けるからー！」

てけてけ「……え？」

救急隊員B「急げ！ これだけの重体だと、時間の勝負だ！」

救急隊員A「ああ！ すぐに近くの病院に手術の準備を！」

てけてけ「え？ あの…… その…… わたし、別に…… えと、  
ここには友達に会いに来ただけで……」

救急隊員B「あまりしゃべるな！ 傷に響くぞー！」

てけてけ「え？ あ、あの…… 「めんなさい……」

救急隊員たちは、あつという間にてけてけを救急車に乗せると、そのまま、走り去ってしまったのだった……

メル「怪我人をみたら、1・1・9…… 救急車を呼ぶ……」

メリーノ「あつ…… あれば怪我…… だけど、怪我じゃないと  
いうか……。まあ、助かったから、いいのかな？」

その頃

ソアラ「まつたく、ビヒービーいるのかしら？」

そう呟きながら、夕暮れの町を一人歩く。

その後ろでは、救急車がけたましくサイレンを鳴らしながら、ソアラの後ろを駆けていく。

てけてけ「だから、私はけが人じゃないんです！」

救急隊員A「落ち着け！ もうすぐ病院だ！」

などと「中の騒ぎは聞こえる」ともなく……

ソアラ「…………てけてけってば、気が弱いからなあ。変な人につかまつてなきゃいいけど……」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9832y/>

---

流転恐怖傑作選『てけてけ』

2011年11月29日19時50分発行